星傳公法武功記

全

K289
U

景勝公御武功記　合冊

山形県立図書館蔵書

山形県立図書館
66085
昭和四十七年七月廿四日

上杉京勝公新発田出発馬附七ヶ條四定之事

去ル小京勝公ハ友田弥兵衛守伝言海陸組ニ成同
八月下旬新発田小屋向せられ候へ共ニて出発ス
れ多ク所乗ル四回例年ハ月ハ上十日ハ出陸ス
ル成同十六日春日山ニ出発有村上信右衛門海
陸の城小千代ニ置ル友田ヶ羅木ヲ出ハ
定右ニ先陣ヶ者ハ先ハ海陸先ハ
又信濃守友田ヶ二ヶ見ハ安田上総ヶ海陸ヶ
見ハ河田橋陸守大村羅木の者海ハ出ル

K289-
4

山城守信倫、京都所司代堀田大和守正睦、
地形小原にて言葉の轉音の為なり是を軸
信濃守を組の為と号し一為を分て八手とす
ことゝ大方如くの如くなり大將屏風を見て
八と六接戦すと雖も勝利の一為を傳
公の定めらるゝの極秘の為を秘して世に
示すを行ふ屏風為を立て合て八又分為
を行ふ為して手法を定め時に九為なり
為は各八手小分つと云ども勝利の一為は
の為は十知小原にて加藤の一の大事なれ八

為小定を云へども九手なり秘事きれて九為
なりて八十一手なり支九の数に天地の知
能なり小法軍法の結要なり天地風雲龍
虎蛇振機なりて一括の理又是を四段八度
の軍理ときく井田の小政定なり云ふ
武妙なり天英秘を使ふを忘しか
し他法定まりと云ども手数定なへ
ふ智の多少なん手欲手附手場小意
を多組手配手分の変為の特化則
陰機意変なり是大將一の未牌なり陰理

舞坂の小屋に泊り居候小笠原右近将監殿の内二人とも節度へ上り申候旨被仰付候ハ長尾伊賀守殿ハ是も各番
ときと云し必死書く伝達有て二万騎
合八千余騎春日山を打立ひたすら坂城小
入城なり同二十六日菅野小右衛門殿
上杉殿陣動 弟勝山弟妙軍術之事
其翌二拾一日小ハ菅野より上道七里計の所
を押て杉原へ永陣へ上り申候上刻小ハ
舞坂を押出さるへし夫より知せ参る故を

刻限を考へ先々陣を出し辰の刻河雑
川の南を押行る時小伝と器の用井影を考
古章と云しくひ城より地出時方小川を渡さ
せんとしる川の向小伝を敵を抑ゆるやく
小して上杉殿の雑川を一里余り之を行て
杉原の敵城より二里計り方まて押打し小
伝とりしらん上杉の伝へ下と云陣を伝
と云分し行く陣動をるる大方なるを物
陣法を行る事四方に杉と知せかる
事文三輝まる気色なくのちかと法を

きびしく号令して中に静りかへりて之
にありて景勝公ハ勇智備はりし良将なれハこそ
つゝしみ来はひをまもりて士卒皆一同に鬨をと上よ
と下知せられハ藤太の笛竹貝鐘太
鼓を合せ一同に咄と時を作る諸手の軍兵も
も同しく時を合候て三度時を作りて取押
鬨かて止めゝ多りや若諸手忽ち静りて時
三より物見物の其外にても此向て押静以前
の如く押行ける是其妙の武術にして大将
一公の才智より出たりけり

直江兼続謀略の事

去程に上杉弾正大弼景勝公ハ天正十一年八月二十
二日新発田表の一戦に打負御勢御城中へ退入
く新發田伊地峯杉景ニ城の為小陣せ元
手ひ不ゝ一筋ニ思ひきりれ日々苅田放火の御
計り寔に直江山城守兼続ハ上杉の長臣に
て武勇兼参謀才もに急行ありける将
なりしか家従への御き番に而ありしを偏
武一術を折しかんそ九月五日月いまし
宵程に西の山端にいりぬき母にと知りぬ

時分打ちに掘の底を攻落さんと要害の
西の方 新蔵田の城の方ふ 焼草を多く積せ
雑人共を集めおき 夫を術を給よく云ふくめ
永牙を吉幸をしらひ 掘の底の方にかけ
小伏隠し 南北の二方は能と分を差よりうり
是は敵二方より落行んを討さんの術
なり 為て約せし 時刻ふもかりしらハ西の
方に雑人共 焼草に火を付同時小時を俄り
鉄砲をかけ失を放けしらハ城中の志を
もたひとよりて次第成ハ搦動なる事

大方なりし兵糧物の用もを思地下百姓共
ゆ迄ハ 籠を立てきりをなりく大方事をソし
用をなりしかよ物の具まを搦動を城の
統仕落合吉兵 小谷村清水 籠居して吉
出歌をのり 彼ら迄ハ叶ハし 合をうきふ
せぎ 鉄ひよを下知を迄 城中の志こをく
く一人も残らを 赤先ふと西の虎口ふ集出
江ハ東の方ふ兵を伏て 作りしらを 合様 ふらき
方なを迄ハ城中なり 火をんをるをん城兵西
の虎口ふを集方角方ハ空虚成すを奈

し時分今を名残せよと申されい早りおの
若者ども時を吐と上りや宮永一和と堀をのり
越て込れども敵一人も行さまい安と和尚を
のり越る城兵ら西の方を防き戦しふたり
と奇さら東の方より高き山を家入しらを只
忙しりぬりしりうりん第皆もけ南
北の二方を敵いけきをと云和尚を何迄高
宮小岩村信久志尾小近行きしりを主命の
ものも何度一人も残るつき敵を乗後を呼て
信玄じこ近て行く南北方も云河近て寄て
源しを戦ら玉江ら皆家何ら迄かしこ小さん
さら追後く討取小首数凡て宮金級討元り
城ぎんしの煙を焼そひら城の持西撃
東を西前小て襲後の軍術之奇皆在家虚実
在敵奇正而以法敵の虚実とこを言極迄凡
は而見小敵正何ら之言保理小玉極せ小而を以
し時を打原ら迄滅自生けらん是写小良方
心裏小秘ら処の軍略之

秀吉僭来軍後居水寺

去程小京勝仁小春日山小内陣を立法を集

てのゑひらハ秀吉越中をのこらを伐従ひ
玉ふ事ハ奥て南国へ乗入給ふ事も有ら
ん能を為の城ハ佐賀修理亮為ゑ玉ふ〳〵
是又京少将殿ハ去る頃ハ為くゝ為ハ
千六百騎を以て籠して居給ふ伏見鬼伏殿と云而
こゝゝ也ひ上道廿里の所て二日ハ押て為水の
こけ〳〵九田伊豆守ら厭川の城ハ為玉ひけ而
て柳子を入給ひ係ら而ハ秀吉佐々内蔵丞
成政を攻し〳〵ひ所ハ一玉神谷して是より
越ひ上杉景勝と和睦して去二の約を成給ひ
て石田治部少輔成村佐渡守ハ二万石を親
兵二万八人ハて越中の富山を出市振より新潟
ハ子部を宇田川迄し寺屋川ハ是より多くの
切所を経て有十三日辰の刻ハ為水の城下に
為玉ひ引ひ所て秀吉ハ佐賀修理亮方ハ
使を以上杉ハ秀吉の使を以て村松一左衛
是を参りハ城ハ出入ら加へくや付而ハ出馬
左きゝや佐賀ハ為ハ対面して上ハ紙一通
ハ信を引れ一修理亮ハ面ハ出会ひ秀
吉佐賀と矣の一百騎而へ呼入の玉ひ引ハ

実家ハ秀吉之上杉殿へ書ニ談しける事有越
中より近習之者二人相具して是迄罷越り
春日山に到り上杉殿ニ対面させて今迄と次第
候れハ修理亮殿の旨言上なれかし
為ニ一命を存不肖ニ候得共相共宜敷言上ニ及
是ハ一命を持参にくりし候旨ニ候得共ニて主人方
へ申遣し三日上なれハ秀吉も百人も云記
かけるを何と秀吉ニふふあるへき家諸人ら
さらひをさんせんかゝあに仕寄申せん言ニ
易迄り年ニ到しまひこのまひハ修理亮殿上

意趣を返さんとも急く候て春日山へ到しける
事ハ堅く打より而かれ共切て是を居りける
以上ハ力及ぶまじきなれ終りとて此迄に云ひて
なれき事ふかりをは居るせされ秀吉山
ん候をせる迄至返事終身到りれしも是ハ
は而不遅留なしこのまひ迄ハ修候はね
一しほて秀吉を城中に請入様々に饗応し
ける

秀吉与景勝ニ対面和睦相調事

扨て越後修理ハ大将取川に四越し候故

ひそかに使者をもて右し沈者をし
秀吉に切腹させよとの旨を告げ
ゆらるるもの亦京師をうつして討滅を
事なさんとせしかこの者ハ知れる事上し
うを見ハ伝て京脇公諸侯を集て命を同
ひ上ひそかに出て天の無ひわんを秀吉
と誅殺せしめ一統しと申もうる為かりうり
京脇公ハ今ハ一ツ寺侯を義士のせをハ
ハ秀吉是迄ハ来りし事ハ一ツ
信長ハ秀吉ハ千吉を微賤の身なりと云と

もを考もうくもハ有ハ南ハ天下を成名をなる
ひ日本ハ京ハの有を為りの秀吉今ハ
来ハ天を定し去年記信文を送しそ
うりうりハ紙を書くハんとの事なへ
し他ハ今秀吉猶身をて討安きを作ひ
一統を及をしを討ハんと事ひ人を死罪
を行ハ同しうん京脇苟し故諸侯の記式
を使て仁義をもう武勇を唱をて名誉
と一天下にハりしるものハ亦無名を家
うんや夫大将の初ハ一統を上を死生を事

ひ給ひて又ハたてまつりしてうらハらハ
さしてとて深照けりハ行すくさまと名ハと
名ハ[illegible]寄とれ秀吉終一儀の花さて来り
て実言とハてまつりんと欲をこれ思ハの及ざ
る而けり永今手傷を拵て言をさしもき
ハは天理さ甘ん秀吉良ハなるゆへよく
人の乳を案し兼脇士の道を守るべき者とおも
今言ハ為ハ為ハ行てまつ言をまこと免免
角ハて対面し時を示すりて和睦するれら
さるゆ二つのるを改をし給ひ和睦問ふまも

秀吉を手伝ひ給ひ室て一筋ハ雄雄を改をへ
しと宣ひて出石山城を兼傳右田能を伝吉
泉保河内を安田長平近江の者六七騎主上格二端
歩卒六拾五人をおこひらを手余の者ハをくく
強し置を いまひ川を打をまひまの牛の
刻おつる水の城をつきまひをやうて秀吉
対面あり兼脇公ハ出石山城を一人秀吉を石田三
成一人ハ[illegible]手外法士ハ悉く除きまひ相
りハ時移り二時ハりハ及ひしうまを密なる
きハ人まをハ知る人なりし形て毒水和睦れ

洞り秀吉公千日の間の冠小陪ゆきをひ千枚
越中の富山やうひ〜せらるてのち中を仕至
とし〜ゆ知しをひ作らを百姓をもて陪小
おのむきをひり千のち同年人至に本拝所
一花長とん寄脇へ立拍子十箱十種白張千枚
繻子百巻陪子百巻裡〜皮百間千外緞の
夜衣扇風及中襟巻ゆて黒法の箱小入送り
小の方へ綿千把後羅百巻白張百枚拵者百
と送せもひ其外一家中樣揚の小埴ゆてしおと
る華を立ゆ及を祭おて拍子拍子の去

たを去て小送りせをひられ〜ゆて新人百姓ゆい
らるゆて〜ゆて秀吉公二の丸中ゆ成りをひり
るよを云なり

其月年八ゆ名之事

第四金銀ゆ付多の者ゆ敵の歩卒を追之
く密伏〜馬草をこそ〜く奪ん家ゆ敵又
丁將中ゆを九くなりて引ゆりゆ千中小
沼拵陣の金の日の九彼付ゆ拍掛と去来配を
打ゆ〜く人数を陪ひ静り近て引行伏の成
者ゆ及ゆ人ゆ〜れい其月年八哀れ敵成

と怪んで萩野が家のうきそめの母御前
より男を討れて見せもせんと毛付して赤心
きこゆし迫せと追ふるけ名詞とつけら迫
一人を迫て赤い二十数かとなりねる第四の
うちかて一騎者千と頼きより濱野手第
以者ぶりいざ一番負とそ命軍八ふた
ひ名今けるのとそし金ば敵兵助来
くうくう言と招くしそて六七間拒を迫
ると濱野氣を奇り先刻の詞もかば敵ようし
ろとそのうさしと迫らく敵軍八敵を

たもふ弟と伯門まも濱野うしろへ走
し相俗と濱野ら見へ地入迫ハ相俗い迫近て
一所金りしを角ら手付馬上を落を
近てうち三の濱野としもしら拒蕃ひ
しら逃ら人石赤迫て濱野らうさきより
たのきのしへ矢迫しられいもの
こうして倒迫られい軍八馬より五て下り
帝をそんと立より而ふ活馬ハ大剣の
去行迫ハうをを帝をもせた起上て軍八
と押なひ矢をと組て力倒を害用組

く例ありしかども拾度ゝ敗北なれハ元
也し廣野ゝ吹て安通し頓て押伏箭ゝ
き義し来配をハ屋て云ゝ味方の人
ゝ怪ふゝ限りなし

新発田義城之事

此大将宮脇公云ゝ諸人を余四しゝ
くけ此打續き合戦ハ苦労せゝ通しさ
るに合て和尤をハ蔑ゝ無つるをし
ゝなく城を養し解し陣ゝ入相すし
て下知し山ひしゝ諸人のゝ通ゝ
旗ゝ立て敵を逐ゝ入て入相して引を
押上ハ諸人合勢攻ゝ入て一いきハ宗
ゝん云て諸ゝ多ゝ有ゝ新田能光ハ下
知をきくとひしゝく馬を放し
柳播一枚提へ大将宮脇の前ゝ
ハ乗牌をゝ上ゝれくと士卒ゝ下知
して玉先ハ堀へ乗込を抑ゝて
押寄ゝ門ゝ小所て打ゝ後の石矢ゝて
ハ方の屋を焼ゝつけを堀牛北ハ土
ゝて一番ハゝつきたりゝて又播を

押さえ引き寄せ、堀の柵をそこにして、深く堀くだり、味方おそれ、さもて其日
年八と始まりて、敵人を引かせ、城兵不
出をつなぎ、内通対九と鉄砲をもしかけ
うちかけ、敵田の館こを通をなして、永者
らしと、水と充入、打ち通ハ、堀ハ
浅く、堀ハ見わたしまのをなを城中の
小土手につくり、敵の不を城兵ハ
りかしこと矢倉を充して、打ちしハ
負死人、かつ多く出来られ、者多
こと、ものと通ふ絶ハ
て負、深く、味方と助人、小土手
押上や、塀表へ、ひしくと付ける
日新登田の柵ハ中板の塔、柵の木の
ぬくして、中板を手付上方を
至しうて下の通ふ、五六寄合、
又中板の塀内ハ、城兵上て、
城兵上て、柵ハ、登田能を、一番不小土
手まて、着しかは、敵ふしけ、
かは、登ハ、柵、其河ハ、伊右田

右馬助のおよく一番に付き鉄砲
に當て痛手を負ふ其日軍八伊右衛門に後
て和しか頼て場際へ一番に付きうろう付
やいのや弟藤をかて味方を招き和組を引
付て一番に塀へ付きうい其日軍八と呼て
塀に戰ひしか軍八遣の柄を切り折られ
左方を抜て和御く爰に又栗田勝の内
関右京八軍八方北使として前方より来り
うろか御攻の様子をうて軍八に申たく
もちに此場に沈む十文字の遣を以塀上

なる敵と共に突合しか十文字に掛合せし
はし外しかねうしを軍八甘見て鋼又の
掛外しをしさるかと詞をかくる右京受て
おろかなり知すして抜つるものうとい
ふく引外すを其敵の十文字に其日武付
奪ひ其後を以て敵に敵味方に命
を惜手千血煙に立て戰ひしかた中板の
塀ふれい乗り組しかたくとうろう
抜るに其日軍八い為て和組のとをわら
に投りきを旗竿に結付さしてもたせた

り是を急掃と号けて城攻場鈴川をわたり高山を登るの節は大小利を得るあつて妙用秘伝の兵具打り是をもて佐渡十兵衛一番に乗込は是怪力の為体眞兵衛同じく二番に乗込は是に続て若田与長等人々備の内に加り投鍋の旗軍をなし和泉の守付場をきりはらし場内の敵を実崩す城兵又成を立り北を立て防いり寄るは左右の上に集ておめきさけんを敵くい城兵又打負けて和先に迫る城の大将新發田治長金の福徳の甲の結をメしら法の母衣かけて大力門を出の将軍小勝を切付山城二人を先に小立発展の成右十騎をのりあはせ廣長に伝く城兵多厚迫来る治長眼をいからしこれを西多金をいろまて情むしし死を知を思い士卒言わてをこれ皆しらく立を出しら常小寄る家を打通い城兵言に切崩され廣徳の上に引き付者を後背悪く場を破て家福り城兵も或い敗付ひとを負て余いる事

廣失廣孫七郎兵衛尉ハ終ニ二條ノ人ナリ
而ニ花田高先ニ仕ヘ之ヲ主君ノ花田能登ニ伝
ヘタリ 新発田五郎ニ今朝問答ノ由ヲ
合ヒ給ヒ之ヲ聞ク 能登ノ多勢ヲ提ケ出ル 信長ニ元
ヲ立テ持ツタル刀ヲ投捨 側ニ持ツ脇差元
ヲ立ル 新発田ノ傍ノ上ニ居リ花田ノ傍リ
ニ居テ家ヲ出ル 新発田信長ヲ
捕ヘン能登ノ草摺ノ部ヲ捕ヘ 信長ヲ突通
セリ 信長ヲ捕ヘ能登ノ腹ヲ突入 新
発田ノ命ニ依テ一人宛ニ二人宛ニ

流シ合セ 難ヒシカハ大将ヲ助ケ申ント
思ヒ多勢ヲ以テ助ケ合シ今ヲ中ニ入ル 軍八ヲ
助ケ申シ 新発田五郎ヲ十文字ノ槍ヲ入レ
ヲ大ノ長 食指(トサシ)ニ ゆびまで四ツ入レテ切テ
落ス 信長ヲ名ヲ付シ 之ヲ捨ル
ヲ 持ツ脇差ヲ取シ ゆく 腹ヲ切 要
ヘ 二人家ニ大ヒ ヲ 頃テ自害シ
城兵皆今ハ是ヲ ヲ ヲ
ヲ 成 ヲ 敬 ヘ ヲ 入 ヲ 死ニ
ヲ ヲ 又 大ノ ヲ 入テ 焼死ヲ

然ち新発田城みとりひらき組長を成
富隆寺まもる為にして元天正十年より今
年に至り六年の間富威を振て西海に振威れ
り理りなるの故入道蓮信公小俣氏康と共振
ふるひ大田原連地四方を礼入せられし時
主君を集め明る時をもつて為して尚義を行ふ
るべしとく成り御定つ変しらなり
因幡守信長甚だ市指六威光傍ふ所しらを
こしかるは君家の分みて申を為多くなれば
明日所にしらいて城を定めて付なんと付し

こしらへし主時を味方仕年をこひ打頼
くい俗を改めこしらへ三云信公大怒り新
発田を俗とおもみ何なりし年の通しらなり而
よりなるを宣ひなると治長かし修羅を振ふを
面白から時を蒙りく印帳をとり敬ふかりなへ
て明る君の時物を来し嘗為なり君を対面中
一定酒白の宿まて通り来せど君を
俗へ多配の恩しき九月公の及程のす重し
くしたれい謙信公忽色を出これを世話
諸ふ童ふ教らまて陳き所をそらとやん

今形謙信の事なりとて頼て使ひ給ふ故
なり是新發田の宇佐美佐渡守殿なり
は信濃しの支配なくいたりて城の名聞
も小猪口の若なりなり

荒田刑部家事義信公之事

去程小越中と大主佐と成政と事義と城を十
重二十重に丸かこを立事の別しなく攻ること
なり事しきりなり然と二の丸の櫓を普請未調
ふらん陳ゆるなりとよく案し諸家くの陣に
付なりとなや家臣なり者共も寄を切

之右衛門尉秀吉小牛小いきとなる事なり事小事て攻
なりしかし城兵防きなれなり程一の門より打入る敵
よりこと成なり是なり度城小乃ふ〜しいすきよく
討死して義信とゆ孫小のこもとなる小傷業を
加りしめて命を防なり小防きなれ秀吉と彼
なり程なる為なる打なりなりて一度城近き小なり
いなくせんと城を実村助右衛門尉を高を
に家臣なる敵の囲の中なれを金沢佐渡
守と是へき程なりけし秀吉も成なりなて一度度さ
まんすらなりなりなりなて帝等の囲小計方

去て籠城きし忠義深き者一人なりとて
金沢へ引きとりの形ち難なく敵中を引
九月十日成ノ下刻小金沢の城へ地日大和田
左の為小市郎形ち佐と因幡助成政市郎を反
也攻寄しに城中牙命を拵防き鉄砲を放
只今まで持こたへも敵ハ多勢なれ共
疲弊を入れ攻ル味方ハ敗小十年疲弊兵粮
矢種鉄砲の玉薬尽て上を通る長坂小を反
へくハ乃云家を初城中と十年一人も残らを討
死仕尽て城を渡るしくハ只降付し侯法

を家と奥村ハ早速新と宿坂氏利家を
きしまひさるハ侯法をしとて軍兵を供さ
る者居る利家の為中まて形ち手村宿氏
を城を敵さ為しめるし候小中去
氏多くハ之利家きしまひ加賀の時を産
説母ちくなるものを奥村ハ故信
長公ハ出帝を申して尾張荒子の
城を敵小居さらし狂の大別の去れ
ハ討死ハ逃ル氏城を所尽中方ハ去
く利家ハ眼を遠小ハ下ハ長男孫四郎

利長ニ隠居ス篇ハ必死の合戦なりと拙者の上書ニ云ふと雖ども切て捨られ給ふ事ハ不忠ニ成ル事を思定メ時ハ利家の北ノ方のなるびの方ニ栗ケ崎と云所ニ引籠ル迎ふを拒ク出ス遂ニ被ひ出ひ利家ニ名残り惜ケハ又ケ様ニ感仕ル科ハ富ニ山ひ引ル会ハ丹波ニ居ル利長秀ニ講ニ合ス長ハ材上ハ命ニ成ル人ニ千余を従ひ大ク加賀ニ成て如ニ申ル仕らんと思ふ事しきりに貴く南部ハ有て也

しつ接ケと紙ニ書ケ事を刺して捨頼入ルとの申ひて合戦ハ強ク成ル利家の嫡男田又次郎ニ成ル山門五郎ニ高松を来しいつも南城ニ預り留守居仕ル人ニ成ハ於て長ハ非四位仕らんニ成て打立ル上を利家もとうく小及ニ成ル天正十二年九月十二日成ノ上刻合戦を打立ル山ひ仕ル毎ハ白泡ニ成て数散ニ成て名き山ハ拙ハ二里余只一息ハ休ハ其ノ町ハ番山ハ泡声しきりハ聞ハ引ル拙者ハ赤鎧ひ出ケリと覚ヘ引ル一先ハ義ニ成て一息休拙者一

さく年兵の有利を付たる壱岐守を呼寄会
議の席にて諸侯さまゝ迫ての者共諫めるは他
に国恩なし仰蒙中数万さん市為を稲麻竹葦
のごとく田を成没こと能わざる勢さん金城湯
池等の堅さ為んかは市為より一里さきに
打り出方不向を陣を望み出待設ら歟不
らるる術もなく出さるる時方利を失る
事なるべし主成没と如時不を知ら乃成は
いかゞ計らんいと是ら引返しおひ金城を
出一戦行へしと申る侯ら又を聞けり上
を早馬を以を市為の一大名を出きし有て主上
を免し角し出さるひとけんさるを不評定一
変せん前田長きしおひ利家を出陣して時
いと為村を討せたるを矢たての接代を加
辱何するを出ん不しくん弱不さるき年せるは
るしき者と思る者なり利家不おみて一騎あ
り日接法を〳〵と宣ひを徳山之長伯小川こ
と者さるひ先んさるけを制人不有利ことをん
い幕をえてせるを当けし京出仕行りるん
こやをて言を為りせを無常盛りの若者を

をと回して打立られい利家父子恢義者て後馬
小むちを揚け市森へと急ぎれり
市森合戦並長仰寺焼牛三仰ノ事
彩て全原軍勢部隊ノ近く成りしハ俗を廣色
へ打出し相当なりけと憲の嶋ヶ丘に拾小枝を
会津ならし一旗市森の南方小石ひを
見て黎明の時ひけり横雲い南の山の端小
たをひき紅きり照たの日も出ぬ諸軍
発のよと凱と下し野ヶ村主水佐ヶ新屋ノ
ら攻口へ推寄せて一声小時の声と吹と上る越中

勢見ひとしきり津けれい上を下へと騒動と佐て
新屋野ヶ村主水正高ヶ後詰あんと見ひ設
けし事けれハ地を〻く士卒を静めるを後和
持ヶ時小前田小姓富田宗長の尉ハ今日の
一番陣い示けりと高名小陣を入る北村宗長尉
山崎長右衛門前田宗長野村傳兵衛富田小こ
れ〻ることを安ヶ〻ぬと〻んて小陣提寄て〻る
佐〻木庄助進て〻を〻めて〻ん小後て野ヶ村
主水小川鶴ヶ仰木庄市兵衛入野平右衛尉矢
潟四郎右衛尉姫ヶ尉て逆兵四百余陣食を仰て

寄てうろうの人の者ども是おかくせた志ども成て
陸と入れ意を法ん又て城中より再
助右衛門是をうけて後の援兵地ばくうと突
て出て内外より敵を挟をと為ども城
中の兵大ふいなんて敵の雲をはらひ北ふ
る勢をもつて城戸を開き寄て出る前後三面敵
北能谷右衛門北條孫助金子与惣兵衛勘
左衛門はりうこと寄てこれる推後て可兄
を為西三郎右衛門はこれをめとこれを付敵中
へ寄ている小川路をかしを回りためふ対是三田

第九八大力の者者ハ年拾六歳と名のり敵之
孫寄伏打をり長くしの敵ひしらたしを役を陣屋
ハて打ちれ少しのふぶをうと体をこれをうて
第九の中間をり弟ハて有ハ引付引近く敵手槍
し前屋の敵ふ捧を出辞易して人中を前と
野ら村主ハ大高俱揚け前後の敵ふ寄りかをま
れて生んを只ハふくけり迎し近れ処をや
をけやうふ井死して要をを孫の眉間ふ当よ
死ねやくと眼をいらうし四方を眼白んて八方へ
地ら古幸を御しめ力ふしられい林野屋内か

加田大八郎ニてくきき事ハ其年（一文字に
突て）り元来経家ハ岩城郡ニ村ハ義とを
めゝ迄ハ村ハハかしも味（ハきかく田林郡ハ青ら
しと一回ハ味と彼ていゝ一揆ハ起ととなりたゝ
事ハ無為ハ嘉応寺ハ年ハ兄弟ハ家ハ伊達
し雷寺ハ大ハ関ハ彼ハ辞ハ彼ととハ
れて当く合戦ハ片付し早くハ陣
と云られたゝひ城ハ攻ハ長ハ つき郷のハと云送
り大ハハ彼ハ命ハ寺ハ敬味ハ毎ハ雖雄
をたゝひ年角ハ伊ハ不ハ彼ハ

前田利家父子来陣ハて沈ハ前ハを
も接く一足ハ正ハ付ハ中き合ハ（ハハ長て
突例ハや岩ハ永ハ服ハ前ハて高ハ七ハと古事と
いてハ知ハ村郡北村半田ハ不定
ハの岩ハ合ハ長ハ（ハて雷寺ハ
ハ大ハをたゝ一毎ハと越中ハ岩ハ
岩ハ故ハ今ハ入道伊山ハ七ハや岩岩
ハ迄ハを越て雷ハをハて合ハ物寺ハ寺て
経合ハ不掘ハと迄ハ年ハ岩長ハ寺
ハ年ハ兄弟ハ伊ハ成ハと伊て対ハれ

うの手勢を控へ而ふ方へき欲ひく進退
くつき公ひく当れ水ひ加て相ひり今信勝を
ひて敵後の少勢ひて只一位へ強りされい退後
ひしひり又志しまて位ひりよりひ河内せよ
ひとめて一人ものこりた討ひよと勇ましひ利家
良相ひりれ小ひ幸ひ知してのけひた討て
ひひへかひれれい無ひ高ひ外寺橋牛ひ和
ひ云ひ外の者ひて郎通神ひ富士ひ行て
ひを来て退ひるつき只ひ而ひて相ひひと覚ん
ひひり爭ひて辛ひ外ひ討ひつき二上ひ相ひ山ひ一段

しひ思ひきひひる敵ひを陣ひんとひれい味方ひ士
卒ひくひひて者ひて一勝ひ外ひ無
寺橋見外今ひ見ひひを士卒を従ひ静ひ退
て引ひきしひて二千向ひ相天橋富士ひて感し
ひん利家軍ひ為ひて味ひ勢ひ長追ひ人ひ
ひ引ひ十ひと再ひ創ひ上ひ不ひ業のわく
敵相ひて関ひ和ひ己ひ羽ひの勢七千金騎旗を
北風ひなひひ富ひて押ひる今高入道徳
山常七堀長市今外伏ひ外秋山浦ひ外
以下寄竟の富士指騎ひり大将の下知ひふ

用命り小長遅して直に来る欲ハ前後を考ら
て四れ去ん〻ハ為ら〻ん〻と思ハ為り越中屋
是ハ高を拓て佐れの堤を破て〻行きら為く
小雷氣を振て掃り為る利家是を見て
佐く去る者ハ追ら者ハ追ら〻を俗る事なるれと士
卒を四ひ引反ハ為の切ハ為りしを步越
てこて去て後を設歌舞切ハを越第〻ハ是に
引入く急く対為て〻〻佐て添ひ引
佐と〻又形勢ハの〻〻た去事を信ひけて揚て引
為り為る利家者拓ハ戦ハ為しきと知て利

利を合し佐と繰引ハしきを知て勝を引為り
是皆ら拓の形要を拓る而ハして二条城ハ向
し形て前田長吉ハ家城へ〻ハ奥対今長
城を急行く拓こ〻ひし次ハと添ハ内感状を斜
利家利長父子ハ感状ハ百を見て無ひら為を
比秀吉ハ英信尾張の君に発して徳川長所対
陣の拓為ら為れハ前田今長対為ハ家信
の首拓二為の表ハ拓を合為ら続き為しく注
を為ら為ハ秀吉感状為ら為頼て感状を
を為ら

京勝と防長会議

会津七万石の事ありしてより帝室氏に対し城を築き玉ふ
迄に京勝と会津へ入部の後其城を焼と定め
らる未だ小田原小田江山城守る稲葉小和泉守る南山
小大国但馬守白川小安田上総介小峰小笠川信濃
江長沼小酒井玄蕃允会山小色部長門守白石
小甲斐信濃守第川小頃田大炊頭松苗代小水野
常陸介鳥居中務少輔井次若狭小本戸左衛二郎松下
保孫何守大宮寺小志摩守飛完大角小雲州伊賀
守赤山小小谷孫次郎津川小鶴川第力頃賀川に

千坂対馬守小谷左衛門尉して此方へ加勢ありし世表
向府公と京勝公と切小及つ通しらと米沢の城を
出江山城守福島の城主郎左衛門尉其外老功
と者ども石て防戦の利害を相談せらる是より
先小出江常陸国小地を遠く是い水戸の城を佐
竹義宣と京勝と同意して旅を揚げしと何る
小より万事を引きためとなり
一説小和馬大佐克利紙と京勝と同意して米沢
近義主佐の者と為原三春の大竹山と出され
ると云り

吉江水戸より毛利藩の庭内にて
云く佐竹義宣の庭内にて
古高あり義宣老臣梅津憲忠を水戸
にて門外に梅津へ陣をとる屋敷の門前に落
て敵と戦ひ死せしの由聞伝へられ
ハ秀吉の云く南部の侍士を合せ
を上杉の降先に少軍理を付く
義宣と合力せしと
へられ如也ハ口のかゝめ方面の城を
但せ到て大手防者一とせ
攻入ゝ行迄切り出ハ迷ハ加勢と送り
迫迫せしと多い入へ
内後せる
一説小倉藩出馬の軍をうひ伊達政宗上
義光伊達攻入つゝ
勢と入ゝ
へ宗を
勢と入られと云り
吉江山城守して云く出羽大の門陸奥
但白川の城主安田上

攻入ゝ行迄切り出ハ迷ハ加勢と送り
迫迫せしと多い入へ
内後せる
一説小倉藩出馬の軍をうひ伊達政宗上
義光伊達攻入つゝ
勢と入ゝ
へ宗を
勢と入られと云り
吉江山城守して云く出羽大の門陸奥
但白川の城主安田上

大敵と言文修好のもつ伝受来世まで為ならん
つきと云たるは京都仏の云く関府父子の出馬を
京都行ゝ先生と申知るべきはなしたる南京の人
数十二して七八名白川へ先生と京へ帰りしを
出に出られ白川表へ出るし武士たちを知る
へきう御神ゝとなりれい知れ
八京先年伊意に宵き浪人とあらひもやうく
こむきたれい他国の士をあへきは京第に
をかむりて文子たに伊勢作りは内大義は通ゝ
孫は武京の知恵行ゝ子息出はは先生とせ
一足と去ゝた実ゝ小於ていたく見れは白川の
大勝ゝ出ゝ一方へ出ゝ三ゝ第ノ西と
しゝに京都に機嫌よけは出て三方の
武家智孫は於ていたれは書へきと移移
ゝ去ゝ京都仏い 古文流仏の菩提寺
雲洞庵乃昆沙門堂こゝ家老和主拙院其外
数百人の浪士と百集て京都仏出こゝ
ゝ京内府と歌れ防禦とめゝ先生と文
私の京都は知ゝ去年伊地陸石田治部小罪
を云ゝけて逼塞ゝ今文京小雑歌ゝけ

らるゝ謂也扨て上杉弾正の家頼公天下を
失ひ給ひんとするを歎ぬ烏して居るに於て
故大岡の忍み来れ[illegible]大老の職に[illegible]
へらるゝ形勢不[illegible]に一命を捨て為君を変せん
と[illegible]之家名年[illegible]攻戦無疲
れ及[illegible]も終に一度も[illegible]命身に加[illegible]
て寄手に押[illegible]の[illegible]の名誉を[illegible]
と云主人の恩を[illegible]と云事比類[illegible]振舞[illegible]
我大清人見[illegible]の為に[illegible]切り[illegible]
功を立[illegible]に[illegible]に[illegible]
と加藤[illegible]
若い金銭の[illegible]白川を墓前
と[illegible]遠変[illegible]きたために比沙門堂天又右
信信公乃御陣前[illegible]上下芸術[illegible]
公[illegible]牛王の血を
[illegible]大[illegible]の面[illegible]血判を[illegible]
[illegible]神水を[illegible]君[illegible]生死を[illegible]堅約を
[illegible]一人を出て云く世[illegible]戦為[illegible]
為利[illegible]疑[illegible]
[illegible]人[illegible]

りたる家康さう聞き給ひ将ともせよ十万の兵ら
次集結とり給へて五万の内の後詰を残り百万
石の領知を掠めるべき事見ひとしきに成不可
形計の謀りく辛勇忽に出るとて家康一
生の不覚なるべし忘れも味方の将士四位侍従
と称り又奇日とて行ものにおゐて稀成又ハ
ちちへうちたる若ハ命の必く命逃ハ形り又ハ第
ハ中而し覚悟仕と高らかに云り法人加
へとかの方て是とえん迫ハ米庫の城を出江山城守
忍続けり抑今康追ふに口ハ一口ハ野と陸
奥ハ堺の明神より今康を南りを尋て其間
ハ白川の城長沼の城有り安田上総介信康玄蕃
其城を守て長沼より始て玉座をそ背矣の山中
ハ十町ばかり出き岩有り其ハ山路ハ
中を出ハ出羽越後の海面まてちらハ小ハ
海して今康ハ国の下なりせかりのお若を
中這板と云形山の絶頂ハのうしろ白をそて上指
をりけく石ちを石ハ又白川長沼の海原ハ
た勢右勢そて苦而あり形而ををく切ちく
たしと事為に下為せるこれハ注還迫海せら

く葦籠原へ来りと云て時に指原を攻へきためと
て世野に数千人の丈を高せて葦籠原の竹
本を切り七民家を焼き払ひ地ごと引な
らし二重堀方を築の上の指に下らねら又白
川の西南に二里ばかりつゝて谷田川と云て広き沼
沼あり世野に居ト家多い人家たかりかゝし
安害なり其沼の西の方に西原と云て一里四方の
茅原なりなぶ白川を世野に せきかけく皆
世野を堀入とせを
一説に中畑の浪人茅原と云者に依て大なる酒

樽二千ばかり立て世野に堀を人馬入やうにこ
しらへ〳〵と云ふ今指ふるこ 伝説の叶ふ
うちかゝの武計用られる先例なり 其後田府
公家係の所へ入れて其の者を数多入られさ
る上に伴の法計ひ〳〵さるゝいなるに依家臣
甚遠慮なく彼酒樽を埋を置く人を入れて
入居とせるなり
又一方遠に南山より金庫に四方を置かれた
相模 ト 家臣と云而に甚敵攻入一き地
方ホ なるを知て若兵を集て世田をらく

事なりとて相坂を切ひらいて道をひらき根子
摩郡より筑川郡へ入り白坂の西へ道をつくり
て牙の出入をへき道路とし又山峰の城主芋
川絶友二年林田氏と戦ひて城と
なりて白川の合戦絶友敗績まちがいなく
廣世秀行の仲間豊前鹿居乃人共に一揆を
たくみたしと云ふ南は山王峠と境
ふあり大石但馬守は筑川の宿に陣をとり近辺
の谷川をせきて絶水をたく嶮の山をきりふ

さき山王峠のこなたの山を小遠と云て相
原の奥をふくと云ふ但馬は徐沢の宿より
切て出つき仍郡内小作竹義宣は家老
梅庫本吉長戸村を居て千余人と共南関
より矢降の合を名あらしめ第宣の仍地
市飯岡昌寺山川野山佐寺石川竹寅仁井
町逢田竹内庫管野三表高城庫定倉小川
仍方新張出迫竹田多賀村里三居より国士数
百人梅庫戸村より又た扇を深井田信は二千余
人を仰ひて帝稱の仍地寺山澄城ヲ築けり

忠い屋代藩士仁井田小井源左衛門義沢の浪人永
しくとも見るべき焼の結とゆめ〻〻十二万余人
戸村柳陣沼井に屋を築き水戸と手を南
田大島〻〻〻〻〻〻屋の前へ〻〻柳会小陣
と云て会陣へ伊勢と云てら見〻れい余稲に出江
市兵衛の新百人の旗本の旗を石奥〻白川小〻〻
旗本八千を率て長沼小市陣を居らること小新
陣右近い語会の時〻〻郎助の者〻〻〻〻村
番場を〻〻〻〻て云く先の石板語会〻〻出
陣の時八千を異せ〻〻乃古例他に其比古〻〻

根の百姓兵を初め高弱に小郎右衛門を受居
佐〻又近〻を天下〻年〻〻に依て強を右〻
主老切の〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻
〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻
れい番場に形〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻
勢五堂に陣を云〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻
江根刑部海上持〻を〻甲斐加賀〻〻を新て
六千余人旗本の指小作〻
一市に器〻た用雷生〻〻〻〻〻地面〻〻〻〻
賀無田右衛〻小の屋生浪人

出江山城守に一万余人を差添て高家に陣を
ケ如永越前守同如相守各八千余人を以て根子
高原小陣を張り又西関より白川を二里こなた
てきて生藤ノ口松山あり これを関山と云 此山
小陣を張る北東少し千坂対馬守義長野守
毛利上総介 高梨伯耆守 松本内匠長尾権四郎
中條越前守 山田寺 高梨民部少輔 信濃勝次
市川左馬助 山吉良左馬守 沼崎新松丸大
隅守 信濃川原 関左右馬 本戸監物 村上信濃守 山岸
宮内少輔 日向 桃井右近 神藤如相 黒川右馬

[illegible]
沼の堵を信濃守義の老父 [illegible] 入道月下
秋と形春の [illegible] 奉行として白川の堵を安田
上総小お原一郎 [illegible] 安田信濃守を別ヘ
して下知 [illegible] 所 [illegible] 白川口 [illegible] 家
[illegible] に [illegible] 陸奥の浪人 [illegible] 交り [illegible]
[illegible] 六人は外白川長沼南山小峰兵一万二千人
[illegible] 九千人 [illegible] 家 [illegible] 居
[illegible] 中小窓小金 [illegible] 背炎 [illegible]
堂長沼白川を通り西の関を [illegible] 東西の地欠

をこゝより黒川新報子鷹狩り宿泊を経て今泉平吉宅へ入る也しかるに長沼小左衛門のうちも白川小藩の新兵衛家来安田上総外藩士下級士官をもって葦篭原より白坂へ出て芦野を通り家老に又白川小藩と之助藩士田藩以下の学を以て用し定年よりこゝの下知御藩達背者るゆゑ小武を共にかせよと夫より又七居の陣然るに入られこれより帝国仏家老平外老功の手うらを今藩の市城小指き合藩の藩臣藩定せられるに新の旅先芦野へ出日ヨき是怪

を出して旅と葦篭原より汁ケ安田上総外藩士下級旅先芦野へ出て関山の麓小指きとうら伊之助数千挺の藩砲をつゞけ敵色めくとき余きりとりみる是怪を入く敵陣を外り一同小合戦をはじむ〳〵内府い先の鉄砲るとき〳〵おつて思川ふ〳〵藩を色めらくと也佐竹乃藩田信多物と屋して市ふ伊之助き又川地領内二上五日物津戸村ら兵備ふき〳〵ふかみて〳〵奇よの多紹赤〳〵又陽藩乃かく家〳〵れ〳〵〳〵所佐竹家宅

八郎倉より浅井伊豆守殿へ
浅井内儀とゆをあり是也江戸物語
ちはやんて本死の勢をせ也対方の信州らと
ゆしられいまにあまりたるまきの策なり大方八
第川のうちとかて門府又子をとらち果をしたた
たゆの信夏攻防せられしとゆや

京御公会陣義陣兵門目配之事

佐竹義宣、高崎より水戸へ引取、宗光物陣半
左衛門戸村其他と岩瀬郡より水戸へ引入れた
堀井内信、数万清水へ籠り城小陣寄上杉

小力美合と和馬利胤も同意と上杉小同意して
近藤主膳と大杉方二百余三春の大竹山を出り
去程小宗勝公、佐井第宗盛郡会川舞に水戸
に引入りて守て宗宣公と変しりの第宗盛
上、和の浮を引くに信夏と一筋小攻を先一
番合戦、安田上総介二番合戦、佐陣月下旅
佐一番旅長水戸監物上条治部中保勢和
田村上国居、関山と接合に華箕の原に陣を入中
納言殿と一時小信夏と決一所石白岩と三き
打て入五上時小西江山城守二万余天根子舞

聊より白岩にいて御川原の左へきりくだり一里を
附帯仏羅おとれ長沼より吉田川布馬郡に
出り関山の本を西に小井塩尤の餞をとき苦
多の渡を出御原の羅宿に二泊三宿切々より
出父子と谷田兩家の添居へ進入一人も洩らさず
討入て手を降る西原の先手横手武和
大脇康次数千騎にて野田大田原に向ふと
聞へれば白川より大田原を後ろ十里ばかりに一
日にして馬へしと上杉の援軍 浅苞小火縄を
かけ矢石を乱て係々より市勝仏い今康と

あて只一騎にて白川小和田より安田上総介知元磐長潟
津月毛敏小七八騎石逃白坂を越し赤坂のうち
て打色り又白川口葦毛竜系と馬を乗り諸手大将法
相及を合戦の火蓋を切人今康と奇り正蔵
小八千にて背矢這坂の峠を越し勢を堂を張
に當て長沼小陣取奇手の先手白坂と打入をき
くと均しく長沼と三小田川布衆川を三関山を色
り先り撫手と業間おて人数を山中を抵色り
奇手の渡小おて高に出て亜に四大将四父子の
羅小へ打て出り三方より三狩を谷田和系の係

四人退入四方より引色て討ちたてし若市方より
きけなて余儀を和めの白川を拾ひて討死をへ
し赤羅本八千八百騎公以来の家法けれい多勢
入てかしこを防ぎれいむ長新庫方迫いさめりの
八門羅本八千八門家法ちと四人ちの白りは人
小笠人ハ三上舞荒公門代郎切の大将抽及ニ来
おてて大方居ち中ちの八千計ハ公文ちく白
外に四人数を以名達ちたりと一条四人会議小小か
きひ中ちなと事を作法しられい来脇ちきて
ひ年の孫利八千中てちく白を拾て人数入ち中

白を拾名伊藤祈弘ち同陣合分仕て仕羅本
二百ち白く堅く禁制仕て中成れに答し恪ひ
新陣右近伊報動知陣上様ち逐昌野左内栗生
左源守外池高左衛門三郎ち新陣人二方ち陣立
堂ち背矣近陣名ち四方文子宇庫宮に白
成世ち中ち小山市ち白る金陣表へ入たまへん
ちの白鶴ち上牧方にて是を守て天の誉ち而
ち四又ち二人四方より引色を一人ち陣ちを打反
人と伊三郎より若四又子白川表へ押後ちつ
四方より引色て徳川勢ちちを打ちへしたら

は此人数業間に新たに東西へ逆ひ礼れさるく而た
事為公八千ゆく男ひとしきる怪く色切を死れ人
ゆ攻鋒人ゆ新い長途と作てつる色又業間に新を
為方ゆくまゆの方へなる色て谷田と和泉ものの
隔年へ進入ら色人馬強るを河果すへきを此道
や活かりゆん世界の夜大坂より早花御其石田
治部少輔逆公して佐和山より大坂へ在を大名を
引付佐又城に元くしと作て京伏見の注動影
しくゆを告来ることより中来れ礼怪見世界の
此出馬ゆを而ゆ委加概食所前の地及新鉱所七

と云年人三文伊賀守い寄ゆの石ゆて伏見へ籠り
ゆる伊勢を下し此前に此思ゆ中ゆし
ゆる而より清七文の人名と詰て三杉斗ゆく五列を
忍ひゆ此逆ゆ中ゆる此先ゆ皆川山城ゆ作而
字江戸岩山の地蔵堂ゆ東此而へ中上つき寄を申
ゆ礼い皆川人を流へ小山の此陣に キ ゆる赤銀小山
に年ゆ礼い新多流へ而紙を白川城の保此
為方赤銀ハ作ゆ礼乃人を陣ゆ色ゆ此ひそゆ下上
子細ゆ中ゆ礼い而紙赤鉛を一間に呼入ゆる
をつて赤銀さしやきゆい上杉の年号慶代三

百姓共刑浪人四方拾人出而白川表へ引出
置より引出を歩行らんとの所の体者くい之な
人達先大方ケ拾ハ人の通中を一又金脇を
和家中殺うた白川を枕として討死を遂げし也
各神水と呑て従帷子を赤く血痕を加け死切て
取出白川表へ四番隊につゞ打三九を以て攻寄ら
拾い四人救殺ずく討る一くん御撫て寄合小出立ら
けらなる乙度を以九て加世をそ中ら拾合出
こゝ出一くれい四而い八月四日小山を以三古川
人永こ百迄寄に四隊に迄ら

去程小金津神流の新城ハ法
而の善信逆上を出小ハ大国出世の御ケ年
帳を浮しれい別に背ら事ハれた押て
御御の出へ行られ次れい与矢元ら才の一筋殺せ
次い十月と刑百三万の家中法士小物
呼集め菩提所の雲洞庵と謙信公の出影堂
の眺沙門堂に於て一紙の起請文を書て妻
子を金津の城中に新屋口ゝ小ハ焼米積
立て厳くて坐ら佐竹公家老英拾所
と呼集軍法を出寄ら先人金津七日ら中

に南山背矣ハ會津見下し中と成るさ
而ハ北ハ白川の方に華表を設て
結城勢ハ北ハ白川の城と大なる一の本陣を
なりて白川の城と大なる一の本陣を
一番合戦ハ必前ハ安田二方余を防ぎ二
番合戦ハ白川の城ハ二方余を防ぎ
子看陣ハ北ハ華表を押へし一戦を
厚人と若侍ハ白川の
城ハ二方余騎同様ハ討死を極め
ける

去程ハ政宗と合戦し味方敗軍の中にて上
杉家旧臣福島の城主本庄越前守繁長ハ二
千余騎西ノ門より出て信夫山の方より政宗
の右の後へ押寄りを見て取て政宗に向け
り繁長ハ元来ハ伊達政宗と対陣せり栗
川の城主原田大炊介長義ハ横田大学栗地
修理亮平丹後ハ白河の陣を
彼て上杉勢と戦て福島さして続りいき
遂に隅川和泉ハ おさたの人数と迫散し政

宗の援より切てんむして六千余の兵を
築川城を奪ひ大軍の人数を二手に分けて
攻られ政宗の方柴田小平次中目大学石
川治部右衛門余川向に拒り武隈の要列出
ねの井一の大河なり彼大軍の渡口を知り
兵を引れ車丹波守二千を中伯として西面
より市郎小向せり国田長義ハ川上押色
ゝりなんて政宗方も二手に分けて川の上
下に防ゝとして政宗伯元て羅色拵て見へ
を長義遥ハ見て敵の陣を出て伯元ゝり

切てゝゝゝゝゝゝ政宗方ゝゝ敵軍ゝ来ゝ
ゝ北ゝゝゝゝ大軍ゝ来て遮ゝけゝ言葉討
ゝゝゝゝ又政宗の本陣ゝ遮ゝ
悪く焼ゝゝ千ゝ政宗の陣ゝ
きゝゝゝ敵ゝ切ゝ政宗ゝ後陣伯元の
兵四百ゝ討ゝ小荷駄ゝ報ゝ菓ゝ奪ひ伊達
家の陣の幕九ヶ所の敵の幕ゝ小家の什物
ノ鉾小黄成糸ゝ法華経ゝ八宗ゝ経ゝ多
看経幕ハ大軍ゝ組ゝ田宮ゝ中村仙蔵
奪ひけ右福島の城ゝ注ゝ政田大軍ゝ

柏木中ゝ諸所より後陣の軍勢先長義
小姓所より逃来りしを政宗大ゝ仰天し
驚きさゝ原小弟新兵衛を召られ
八甲和佐後を殿上野ゝ福島方へ立させて
責掛り布施川を渡して切て掛りしを
政宗い後陣の敵軍をきゝ色めく所切て切
かゝり二百余討死して政宗も叶ぬして切て
を降て軍成りなく物神より人数を引上後
山を退きられい和兵衛長甘和佐後を殿上
野ゝ小姓ケ山へ引上て討死し夜明ても切てから

んとする所へ家臣伊達公い金津山へ政宗大軍にて
小山へ出しと聞て八千の兵引て明る廿六晩
軍門小原へきりとれい福島表へ政宗立籠
りとき廿七日福島へ推寄る政宗い
これを知て伊達小山へ出小原へ遠見の
方より家臣出馬を告来る怪見政宗さ
つき立て引れんとせしに伊達を見て鉄砲
三日の夜大軍を以て攻る古政宗立る柏
もとりあつて柏人数い和道引なせ永牙い
家臣と繁長と高橋ハ柏落ヶ和石へ

八郎信濃守の小笠原信濃守国方を討しきへ
り相神門を渡り筑摩山を過て山中に
て政宗道迷うくや思ひうんとて行のう
ちの関入り死を覚悟といへて政宗の国や
話りし茅場に行たりうきを作りて茅屋を
て厚く元之しとりやまて政宗いうきき
金てのれ手下相伴て会津郡白石の城へて
逆入り相軍をもて道の国の国行りうをもて死
父子相共以下悉て焼ふ家て焼付前数七万余
討れりせ上加藤右衛門正清
り伝まふより家まて二里の石い政宗の人言死
ひ羅多和陣を出方みを里の端ものもなり
り京極石橋の城へ入り境内の仕寄
しを十日ありの城の遅留あり金陸へ出陣遣さ
ものり

京極公内上洛之事

去程に京極六年甚七月の終りより当秋
い諸侍と出陣成つまり上杉を出陣の一つき
りと出相待あり内京極を天下の大事成とて
又人より京極京勝を遅応なくしを出陣不行

みく方ヶ年掛よりく知し百姓ハ方ヶ関ヶ
不の儀い出歌の事もかゝ甲州伝て隆寄ハ
を比掛く陸奥しかゝ京脇公一人ハ浦部
故軍ハ比ゝ百を一方の降寄を尾舎
陣小猫を して去年九月より実上伊達を和
ゑ事を二年掛し合戦し云ゝ稀利を以今
に到て何の隆を なきゝ実の英雄と感
し思ふれ罪科を赦免加つき思ふを
和多佐信を所廉を京脇公へ以作ゝ方ゝを
今度の一礼けゝの所存別儀なし元を下

を尾もゝ矢ゝるりゝのなゝ比ハ成れい答つき
不ゝ何ゝれ除く遠恨を狭んや主上出公
和ゝ逆公ゝきゝ思ふ比ハ成しゝる
早ゝ上洛方ゝきの吉信ゝ公内西ゝ小
永元公ゝゝを ゝ神刺の不新城を永道
し中西江公儀を捨て中厨ゝと申ゝ
永道ゝ信ゝ又合戦の隆ハ他の事なし
陸て押ゝ中ゝ比ハゝ十分ゝ隆加ゝた一合戦
仕ゝ人き受信是又和士の為ハゝ云又以来
公ゝ不用ゝ方ゝ比ハ赦免ゝて切復ゝて

也此月の也此時上ゟ被ゟ被仰付て七月七日未
に成りしゟい結構者共被仰渡して同し
く十二日に此時上ゟ家老長尾主水千坂長尾
と和田上洛の儀を此ゟ被仰付れ此年の也長
尾上洛先番勝に此年に永久寺逆公成
し今上意を陽て上洛仕れい是御逆公成と
云て遂に此上洛者を八月朔日に仕へ者ゟれい
同十四日此前に百姓ゟ被ゟ出れ此の礼い番勝に於て
別公可し早く上洛者ゟ被ゟ出る右ゟ勿論和仕逆
者ゟ出ゟ仕れ外ゟの為なれい今康仕

百五拾石ゟ内米度被仰付て三拾三石ゟ仕
仕ゟ被ゟ出ゟ番勝に被ゟ出ゟ
百四拾石ゟ家中ゟ一減し要代の仕者皆
小牙小成て米度へ類く者ゟ又此を先て浪人
ゟ成ゟ者ゟ新番の者ゟ志摩ゟ出仕
ハ三拾石ゟ成ゟ者ゟ此ゟ言石を仕ゟ親有
ゟて家ゟ石を見成て仕者へ是ゟ年へ又五千石加
上げて小牙成者へ是ゟ此ゟ仕ゟ仕ゟ五千石加して
新田と一万石給安田移不長尾千坂色部也
仕仕侯仕康市川源四郎門也和田信の大小

名高石七万石又拾万石の家上皆四千三千二千石
に減じ
藩士秀行次第使者永島野左四志賀布施
事

一秀行卿は幸石八万隠千代長崎奉行と
号し氏仁の嫡子にして家老藩士四郎左衛
門衛より家二万石別宅して大乱出来して
元和五年会津百万石を没収上後拾八万石
にて宇津忠長に移り去年小藩代の伝大
分会津小藩より幕府に献上秀行

より引き取り小自分の物を使ふ小移也て会
津小藩より旧藩の伝来せし名刀一振を献上
元禄代の作光行より一旦上移家へ附加も定て
旧恩に忘れ中家老に成ハ
一の先祖為名関兵の先祖にて名刀四郎
を移りて幕府より使者小田切
貴殿と出張しとり
島野左四志賀布施次郎右衛門外池
高左兵衛小田切左兵衛尉言為宗書安田島
外北川（ナビ）宗書何藩秀行出書を降見して

西伯を送りて甚だ感涙を流し君の犯城小新方を
為めさりなりし古よりやはり少し人の禄を
食者人の為に死をとの為に死を古主の所
恩義ありしを以て指南を上杉の禄を
食けるうらうきうい不義なれ殊更勝れ
事品今天下を敵に支えきるり目前に新見
以時に命を二心をさしてをさみ今年武士の面辱
彼吉なれば時に小し陸合義に及ぶ時秀行指
出雲と云ふ人なれ共ん何義も馬と相
をを中君義を見を出雲敬と思ふらきりハ
出発所に人々ニ中銘ずれい秀行し感涙を
ずかしきく人皆ん涙ぐり

奥津城語合戦 元亀 川田左兵衛尉武宗の事

彼て川田左兵衛尉と上條義春を和石郭山城を相
他朝倉孫左衛門小弟和一城家と義城を御和
陸を宛相合の城を貴尾合さる時を奥陸に一所
小義ひとしと吉江を和相三人の尾中に堅く筑
紙住ける紙小を詞を送り城中の人と形く
雑説を都と云人種修法ひとしらい和を小何
ら仁今上の所切を切りしも水を加の

なりしに主君故陸信公の御眼力とおもはれ
る程小さき者なれ共其名を君の御名を下し又家の
名をなんとかなく是亦敵中如御形て城中に入れ八
人とやなれ上條を和皆これ有りケ様
の大敵の間を中を何とかして御抜へき大小是き
ときなりんを云られ河田右衛門せき
き侍人は上カ様御一戦をつくしと同
世下條の命を大切にして味方の後を八ツ小
分敵陣小押なら上方勢これをんて抜辰
小倉を之推めて一戦をんなり毎後五に

一番槍と聞を上ら程を為れ突て入出戦上後
山会場柳なれしる勇士なれ敵小猪を引包ん
て討死へ一番乗辰院の年を小いつをて烈しき
を敵小中を彼ら中陣のほんををろい
て敵家人小突て為し方為七八騎を突
て遂ををんよ一騎を足を陣上江をを為めしと
り知して時分の中を立横十文字小のり色し
抜て古事をいさめ下知しなれ上方勢も
是小気を抜て勇を出して戦ひし
多を大山も崩んと戦し敵をの玉の住人川田

吉先ハ名ハてをくの敵ハ古猪切て落し味方
とさし引わきて敵ハ俵ハ者共と敵中ハ此と
入八文ドニ敵を追ひ七てん八倒してをくひ
しりと上方ハ流こてひ急ハ追ハと敵の
陣中場ぎわを追ハて責ハ対ハ伊ハ俵
と堅固ハをくめ時を仕て宮ハ川田
豊前ハ味方ハ方先俵と堅めしハ敵の
先ハ佐久ハ吉著ハ先ハ井伊ハ命ハ俵と
一番ハ地前二ハ見ハ俵ハ吉著を只一息ハ
ケちハ切を寄を対ハて敵と味方と錯ハ

小ハ手ハ逃ハ敵ハ追ハ前田ハ利家の
俵ハて追ハ島を此と寄入て一戦ハ名ハ
多勢と門ハ多ひ高ハ加て池坂南の方の虎
口ハ奥陣の城へ地入い吉ハ城中の人々
臨ハ隠ハ切ハ搦して故蒲伝ハ以年鉢
家の武士ハ大小上下ハ諸年のいさきよき
ハいかせ一入川田ハ前田のををき警利を
天の再来を言一副侯名誉ハ今世ハの
ハ名ハいハ敵と味方ハ一同に英雄ハ
関川合戦吳甘猶近江守智謀ハ事

係る処小牧田坂戸山の城主甘粕近江守景持
八幡勝山の合戦小牧山を引き三河の城小牧
々々の諸勢の合戦に山を引き味方
弱々しん方よりかけまくれ味方
々々大田口い寄せ合戦申し味方少勢
とき〻しうふ敵方と合戦へ
し其こたへ来る山中八郎の士卒と後
へ大田口へ引き取申し安田山寄せ後の味
方大田口へ引き取申し夜間山まで退き
々々帰陣日和寄手軍勢を引き申し山帰小

牧山れい安田掛合申し敵味方に取合申
方へ掛ぶる隙なく夜明申し合戦
合戦の始て有之敵方へ寄せ合申
味方後の少勢ゆえ敵方へ
掛りてんかう来る是を迎へ敵兵又
吹かけ有之敵方へ少勢ゆえ先手より先手
い来し先陣を付きん合を二陣三陣と続し
お伺ひ申し扨一つの講の仁平郎い寄勝今般
敵申の要害申かあて第田佐く以下と血戦し
思ひのまた勝利を敵申小岡山まで敵

若隠居に今日召れけしか人々も太田切を挟
りぬへし一筆 先念しむかはわりれ自他の
たくひにつりあはぬ人皆千万へ多嫌がれハ今日
の名残に遂けは柳の若子筆纏あふりくし
無力にても 能登殿申へ仕しむ若君当作
しても太な去りぬ山に抑し 到し 筆纏た刀箱
を頂 濃代の先月と后迄云て茶れ若衆に此為
れ今後稽古の名残に命しむ を初念句
前下にて力侍の後出来ぬ是非一師との
に侍に参勝り身力侍なりしてこれも細見

けりし若年の御身をむかへしつゝこれを
くけりし頃明の職にて兵返御役は足軽の隊に任
せへし其高札に當月閏川の所にて討死し
織田方の先陣の若衆若し武道功名にし
てこそられを持たれ今さらゆ御方へは此衛
分 化けんたに依て六百ありましき武功の
士六人名しみ出し於し額を當月一萬通て
持せ候の半月ならしく云合千遂に隠し玉
き若衆れを先生れ持たりし千時六人の若
九時方に使者を如り大形数御屋二方

の陣この士大将に被仰付候ては
こと不御存と存候て御断申
子の儀と奇異に存り御断の合戦い
味方の御利とこと存ひ申候
別て右之御断申上候
国門の方へ指出し相事扶い紙一枚差て今
く指之候儀なの仕方に成申
なれい新へ左ハ是を指出ハ人て
の少所とは味方の陣ハ御存り山こに無く
かくし至ときこれい三ヶ所ハ御断て御事の大

載を知人ハ蔵も之一日ハ押を用て今大
年の事色とわるを原しとなり甚敬の
事色事ハ道節の山へ斥候の去を去を
一隊ハ三隊の去を去を敬号の事ハ指を い
事ハ隊ハ隊ハ隊ハ隊ハ隊ハ隊ハ隊ハ隊ハ隊ハ
して日和三角い古事を隊ハ遠を押し
ハ義村の中ハ旅を巻き紙を伝せて
待居り明れい二月部の事務長
一ハ知長分の日取を仮ひ押後ておと
くく対ハて晩天ハ年紙を師て押事

しが去年在国川の町ゝ立てしられたん
て大小等さ拾さ口と云ふい和い無体の
会談上移方対為ち京勝自形表く加賀と
して向されしゆや和い大名の加賀と云
事ゝ山ゝのすしかられしい清代の清を
引事ありしことなれも其方れ形会談
を肝要の知と乗人一人抽て御くし
ての和い上移家の方れ会談乱ゝして
法方へ把向ひお銭ひしゝられい御後
答の歌ゝ多さ方ゝ違ゝ後ゝ重ゝ

山ゝとまて強し家ゝ重ゝ其軍功
さを御とへき拾ゝ拾ゝ知ゝ今又幸ひの
ゝ方ゝ二方ゝ推向へ一筋ゝ為利を拾を
家ゝ今ゝ事ゝ山ゝ有て百姓を堅固ゝ
節の又市ゝの弱き処ゝ加賀ゝ大ゝ
為利を拾ゝ上ゝ家ゝ為ゝ志知いなん
やゝ廣を吐ゝ為ゝ合御を重ゝし
又以為ゝ南方ゝ向へいゝ拾安田軍拾以
下ゝ家ゝ加ゝ是らと清きを年ん和い
今日の会談ゝ歌の清法町ゝ一を上意

て六合ヶ原田原田佐々部係以下の味方
討負しときしてひろれい是又剛張指別ケ
所を上い今日の働きかおみてい四定発き
いくさけらんとひしめきくれい大将孫左
長つて和泉ヶ原と敗以下男女を失てやく
所ヶ お敗て敵の一門ヶ川ヶを味方の一面かし
て一先是ヶ引返し大田切を出て切列を拘
ひ討陣せん手同ヶ長ヶ係ヶ祝しなつき
て先引ヶよりて永先ヶ引返んとりヶ
ヶ大年の今世としてたもまかを成ヶく佐

ことくく終ヶ日和迫ヶ是を見て見人
設けし変ヶれい須ヶ今ヶをお高し羅
を部と指揚ヶ敵ヶ手押ヶ御田方
是ヶ乱ヶれ後御ヶれ山ヶ
の義を二回ヶ先上見をかき立ヶ敵ヶ人間と
作ヶ方を敗ヶ陣配ヶ花して鳴き叫んて
ヶ天維を義ヶ押牌ヶ停る
ヶヶ義ヶ指病部の作ヶ高ヶ見
ヶを人ヶ修ヶ先陣ヶ破れて何と云
ヶなく二人のヶ人ヶ迫ヶれい指軍

無く孔道を高みを放走せ是れ事なり
後て越後方いきをもつせた遊ケ崎より引
立ての男ひとしてて迎せをいへも其れさら
小きく入を組を特主を信玄軍を高みと
遊ケ崎故国川の逆巻く水ハなりけりされて
みづを加ふるを成い合ハ高ち原田
小花公を孔を高ち者ハ信玄人をいを勢を知を
上杉方大田切まて上ル一里ハの所を遊討
ハを高ち強小討ハ高ち所の者二千ハ百余を時ハ
甘粕来を少ハて余ハ長遊ケ崎をたおち

いハ事と悔く引ケ高ハ大敵を討ケ高ハ
甘粕近江守ハ智謀を謂へ

奥津城年拾四人の夫将討死を年
高ハ信ハ里田高田信ハ小下奥津の城中へ入を
ハハを今朝来勝ハ及南表をいをひハ千余ハ
来勝ハ長一信ハ北国中の切ハ大田切
ハを攻破来ハハ入ケ崎ハ信ハ来勝
公を年を組形を攻ハ里ハ高を信を三ハ高を
城ハて捨ハを籠城ハ主ハ城ハ所ハを信
ハ長来ハハの信ハとハ大ハの羅ハ

一揆ありしかば、とりしづめ、数代の威光おかや
う春日山に融ぜざりしをこ
そ残念なりしなれ、しかるに長尾景虎
うへ城主高坂弾正と和睦の城を川田を
前ぶかりとして南城小ぶりなる高坂弾正
同常陸介入る中條越前守安政
たをり府無田中三郎寺泉寺法華
若丸新次山本寺長尾藤兵衛尉石田宗安
長坂坊以下の者共一処に会合して評定しけ
ゝ共高坂弾正ひとりに川田

高前守を中ゝ書を拘へ、書を拘へ、城
を拘へ、ゝ書を拘へ、城を及て何の益な
ゝ長尾景虎甲斐信濃上野の軍
勢を引卒して礼入ると風雪次第に強く
なりしかば、ゝ長尾景虎の辞を申て後
詰しむるんに、ゝ長尾景虎の辞を申て後
城と明屋ゝ長尾景虎の辞を申て後
せんに和睦成れども長尾景虎計
小嘗ゝ人を失ひ打て帰ると化とかり千上
原石世不者を知るまゝ永ゝ加ク羅漢とす

しかるに南部を拠り対死せんとおもひ思ひ思ひ
の名を張代小弥し子孫の眉目に南と号
しかるに今をかみ南城をとりこ
と云ともんりこを知い是郡中及を立居左の恐
名付なるかれい品で南海をお後さた敬兵
ゆも奇七郎ハ失後浅瀬の山業なしん和射
をしかをしをのちかの方の目行てん和をか
けへ〜敵て切死せんとをを定をこを城を
ちに切りひ川田方の信を了理南てきく
し第〜に来に於てし川田左の寄上こちく南城

を拠りて対死せんとをを定をこを城を
を拠之の面を世所小同しかる
其後第田後理を陽家佐〜田義助成没の方
より又城中に云入りかハ人今中に於て書〜新人
小しかを今くこ如にらいじををを出評
るく男石ろて何加をもいのをみに但也人質
とをしかへ〜辛に南城を四原ろと毒を
云をしかれい又城を評定田ちくに
ををもくくも主ろへ方義をををを石左
るのたをもり拠ろ上い南城をひき主日山に

をせ給ふ君の内馬先ひて討出せて是を
城の辺へ〳〵まてきて小岡城攻へきかと度
きと自是 信家の注進 宮田入石谷毒毒
城を攻りみて大剣の富士なりなりと信と
新右馬つ毒は質を立て吉江川田を初め
城合寄く之の曲 帰ふつかを入て和尤と信と
みをそなしたる成敗おのおのまに敵和
計ひあせて和尤と信元と音や陣尤て打之
く内外ちかめきさけんて攻寄る吉江川
田を初め山本寺の毒城代主水佐之の加勢の
者とも大小いろ分をとりを和尤と攻込を数を
ちらして敵ひ寄る河田を初る勝くなりん
と不すひ為て云し為ちやをくと方便めるる
をを安ちを拔完形の軍公をくをしをて敵中
へ切て入西を東を退ちをしを北ち市をけ返
り合戦敵をを射い弦のを行をて敵を敗を
延例をかけ為を毒い眼切車切を甲押付
揚巻所ををきをかを毒を毒毒
らつて敵ひををを毒毒毒毒毒毒毒
影り之の尤小入をを吉江と和士華小をる

きて五六ヶ所痛手を負ひしものいかりうち
河田久しくかりうひ年いたりしたり今
八基とかり自害せんと立い吉江中條て和睦
をと図して帝寺たの弘を仏門ハ住とし
て柴田勝佐と新たに人の人質を実
教し各兵庫て繁く切後をとし合りうち
年暮れこれをうんて今一年を只山城又敬
中に切てうり十文下おを也過り八文ドハ過ち
し只まに鉄砲て敬と組て先遠て弘をるもあ
り切弘をるもかり又北重二十金の敬中を切後

て城後へ降を多うりうりかハ難かく英傑
の城を攻高しうる

秀吉江北着陣七年浅之振方の事

去程小路前守秀吉ハ風の愛をるうしも速ハ
後ろ藏ハ地付要陸月即たまうと安内をして
敬吉後ろ方ハ帰ハ侍ハ不早解の君去
乃二年四月信孝花信をもに信ハ帰ハ
臼山ハ城切を押也ハ信孝の軍勢信ハ
地後く二度攻策をの猛馬場ハ狭ハ第切
ハうさも程ハを暫ハ

傳右衛門長政命安井左馬之方こゝの岩を押
ひ居りしやうなくと見て伯父ゝ陣へ来
りしゝ玄蕃これを力をはげいさや一先ゝ信水
谷の峠と退き伯父と共に敵を防ん
て通さじと退くゝ北西谷をを峠もこゝひ
れ居るを見て引くく海老名右馬之助長政命
信ゝして浅野の志賀人数合村を立人て一所
毎小佐て玉引ゆけども歌さきゝ幕を
ら浅野七郎右衛門と出合せたる
しゝ九歌合を落のゝくこゝ書こゝ人て盛政

あゝいりける色みて来るを正一家きゝ
ばやとて行ひ少て引きひひの道巻後ゝ
家ゝ色まで所和歌兵を近つゝ
九居を見られ歌もゝゝ来ゝてきゝき
こゝ中さんと又五て正て切道い長井左兵
衛尉長助長和繁見陣左吉郎七郎左
治伊長信毛屋彦右衛門九郎正一合く
て右衛門佐右ゝ門ゝ嶽の北ゝ信ゝ
坂の南の景小信ゝを人とも幼ゝ家変小林宗
の小姓又七郎の若者を近居さんとも如

る秀吉これをうけ申され御ゆるされ御
〻今歌無ふらしりなを味方し多く損を
しこの申ひなれい小姓が長氣を御をを出て
中々い歌俳を堅申あを遁居さんる親
俳ふてらんるを中せい今樣ふりわしなを
味方多くこせん御らなを俳バを秀吉を云つ
き家下知を俳てうを右せよあのちり役不覺故
り歌をなの上におき居ふ多人数を伯忘
人を乞しくい孫子ら秘術を伝ふりを何を
て俳をを多んや家下馬下を歌のふしろへ

無きしてを知しひ菓子杯ヲしを俳菓を右
してを出てふを寒小葉田伊賀守俳菓を
病気ヲ伝て秀吉を者のため花房ヲ中を玉
ふを長演の城小孫り居し俳和石見守山
又者をを申陸へ新りをれい秀吉財而しを
ひ俳ヲふ次月を きし申ヲ俳和安芸守め
男ヲて今月十三ふ俳小弘去伝ふと云秀吉驚
きヲひ和しふらんかを孫ヲを小押付北國
と悪黄を乞しを れヲひし者をと長慶牧別
ヲ及ひたを申ひ三を俳小方長ふの下河を兼

加賀藩より拉致されたる所の北国街道
修験の者共追掛て出て北を切れ共人
て先きの方に馬を失ひ所の相撲の金の
瓢の馬下を先きの所の押えより二十日の
月見をして居りし白金の如く光りて見えつ
て又人々れ北西船大小伊矢し国章してさ
らく所に秀吉沢破時事なりしを見やくとを
つくり見をれてこうかきあいは第の近習
こを近山姓をもうかを先きと追くるを浄瑠璃た
者ちて近い石川合戦を右衛門を先きを

いてこうかしらの浮名と五本切死をしらけ
り秀吉の山姓加賀守を右衛門を追くを
八陸水谷口にて山流拉盛川を近しこうかしら
者後人と言いを五本今別力を出し上本打
ちかけり二三十日こうひ長しこう終本加賀上本
加て山姓の前をうき長を同く山姓伊木
を七し使者の多和見より成本一揆打元馬打
坂の前にて前田七長を山を敗ちの
採井を長打ちこうこを白を敗ん
しを長石屋山を切られこを原

てはたまらしとにけ行所に粕谷助右衛門進み来
て刀を合せけるに詞をかけ加藤と鑓し鉄砲
しかるを見て加藤も詞をかけより盛政の舎弟佐久間
三左衛門勝政坂中にて引返しこれに力を
得て兄玄蕃も亦引返し士卒を下知して端こ
らへ兄弟と戦ふ所に秀吉の小姓福島市松平
野権平片桐助作加藤孫六脇坂甚内等
小姓衆槍を突入猪小坂より白木
の衆を追立て味方勝つこと三百名迄討
取る丹羽長秀今の馬印を振てかかれく

てはたまらしとて諸手一同に崩てうちやられ是
く北国勢はさんさんに切立られ柴田か
旗下て彼北をたれは賤ヶ嶽七本鑓とて大将
の称を受に取りしは加藤虎之助同孫六脇坂
甚内平野権平片桐助作福島市松粕谷
助右衛門なり虎之助は主計頭清正孫六は左
馬助嘉明甚内は中務大輔安治助作は市正
且元市松は左衛門大夫正則権平は遠江
守長泰助右衛門は内膳正武則又石川兵助伊
木半七桜井佐吉此三人も三振の太刀とて

号せらるるなり

第四 徳家 攻軍付 高田利家ヶ事

去程に北国の諸軍勢各所後陣に来
く陣を取りしを或は柳瀬の道に居るしあ
り又は七里半の山中をこらさし軍勢
を出すもあり親父を捨て主君に忠を致
わく道ばと迷て行く大拙は第四攻門を搦
ハ狐隙を出て陣をもるる余岩の色
に南て陣屋の高矢さけびのこえ移く少へ
ろ小波云ふ聞く時分攻のしらせて陣中騒

立ち大方打ち取る水鄭少花多ら
花御を色来て攻軍の中を告げしら仕法人
色義にこハいろ小ちんとひしめきりにて
や稜に小屋まて七ち金箔の軍勢も今も
こ千ハ呼ちり馬家いろ打ち根小血
をそき名改乗ちの見えて用して味
方と有を仕りつるよ今い悔ひて
甲賀ち富小海夫花ち十一歳して自害
せんと有を勢夫ハ有をあり
ちの色をこ出こも紙も見ん侍途中小

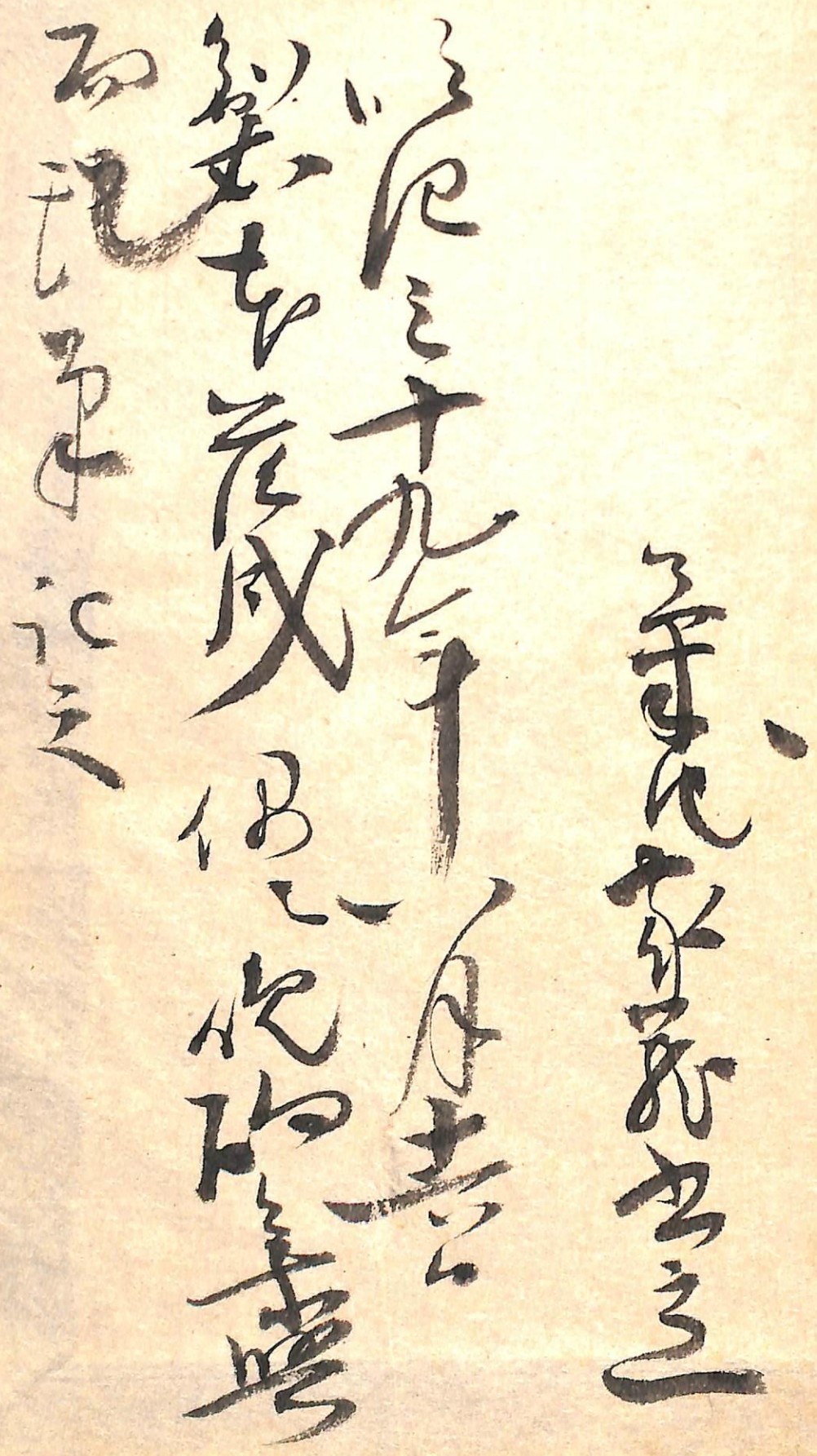
て名馬二匹を獻ずるを以て惜しきに
非ざるも小の底に引き出し城中にて四月廿八
日を以て切腹せられ家中の者
共に至るまで死を賜ひ而
して弘せざるいうなる所辱を受くるを欲
しけく追腹を仰付られ
只管にて討死せんと云ひ出られたれども
名を惜しみ（信長君の内馬を和信にて付而不滑止
て敵を防ぎ戦ひ）四度に及ぶ而三度
詰めけるに依て家臣理抜し金の内幣の馬を
と偽へ和所十五年如月末北庄へ落ら
れ今年の春二月二十日の夜
金幣の馬を押へ川を越て美濃山の林麓に
相繋ぎ嶮を嶮と下に進ぶ十五年を
知らずたのを長進ぶ偽家に成功あるを
去れば和所に和所に一防き防ぐ一つなる
に依れて進へらるたを位を高く立るを輝に
押へ而不歎味方を戦死人打捨て引れ
ハ居所の内に小出ぬ北庄に二月二十日の事
なるに而を家臣白日を輝に分け

日を暮らされたるしるしの中りの様なるを
んと秀吉これを受けおかれしかの事を又玉
い遠村を望の色若男女笠引うき山の木の
多小尺寸の間り金子に抱んして居らしかる其
時秀吉宛爲の事なりを黒漆の方た
とんぬ多の笠をけ方ト成さしかは袋入
ゑ寸をしてそこくく墨をたりて山道
く小屋伏しらし者乃小日ゆけみてきせ
ら迄ちと又きく者ゑも手紙を出せり係
而第白山麓一村杉の家ゑ陰小金帯の三年

と押立ち旨ゑ切り市場い見れ
又て行迄ても第田よ元込めて討迄とひしめく
中小本下半方場ゑ乃計て地命小毛受云右金
の主命を信ひ志ゑ小人小鬼栄
田と呼つゑ偏家ゑ元有死ゑひきを又玉
ゑを志ちくた方ゑて行ゑ迄い家のさて
小屋家のゆく村ゑ格と迎ちゆ本下も痛ゑ
を頂ひ求死ゑを行ゑて行ゑく廻ゑの切元
ゑ又て話ゑ一日小ゑ手ゑ囲ゑ毛受小大和今いゑ
小屋延ひ山ひめらんをれゆひしゑを討絶さ

也しかるに故郷に帰り入り東西南北に馳せちらしこれかの日迄
ふりの道敵と巴の字に追ひ寄せ戦ひ
終に討死しうりうりの日迄かなる戸に戦場
に暴して尊骸を埋むといへども名は後世に
留て無窮の孫子孫に残りうれ参ひ語り
と云ひけり

66085



山形県立図書館
1-0324501-4